

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト（以下共通テストと略）が4年目を迎えたとともに、平成23年告示の学習指導要領に基づく最後のテストとなり、平成9年以来続いた「世界史A」「世界史B」という世界史の2科目体制も今年度で最後となった。次年度からは、共通科目としての「歴史総合」と、「世界史探究」という2科目で世界史分野が出題されることとなり、共通テスト問題作成方針（以下「問題作成方針」とする）がより反映された問題作成がなされるものと推察する。本稿では、今までの「世界史A」「世界史B」を振り返るとともに、「歴史総合」と「世界史探究」への期待と要望を述べていきたい。

1の「はじめに」では令和6年度の共通テスト本試験「世界史A」と「世界史B」の全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「総評・まとめ」では総括的な評価、4の「今後の共通テストへの要望」では全体的な要望について述べる。

1 前 文

今年度の共通テスト「世界史A」と「世界史B」本試験問題の分析を終えてみて、昨年同様問題の内容やレベルともに教科書に準拠しており、日常の授業で対応できる内容になっており、共通テストとして極めて妥当であると考え。出題形式に関しても、設問文だけで答えが導き出せる「基礎的な知識及び技能」に偏った出題を脱却しようという試みが見られることに敬意を表したい。しかしながら、この4年間の共通テスト問題の検討を通じて、いくつかの課題もまた見えてきた。

マーク式という制約上、思考力・判断力はともかくも、表現力を直接に問う問題作成は難しいかもしれない。一方で、新しい可能性も見えてきた。学習指導要領の地理歴史科の目標は、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う」とあり、「世界史A」の目標は、「近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」とある。また、「世界史B」は、「世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」とある。

今回の問題作成方針にある「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する」という視点が、実際の問題作成においてどのように反映されているかとい

うことについて、大いに期待するところであり、リード文やそれに付属する図表を精読することでしか解けない出題が今後増えていくことによって、知識・理解だけでなく資料活用能力を見る設問も増加し、単なる暗記物に終わらない高等学校世界史の本格的な授業が高等学校の現場で実現できることを期待している私たちから、共通テストが大学入試問題の一方の頂点に立つべく、更なる御検討をお願いする次第である。

以下、今年度の「世界史A」と「世界史B」の共通テスト本試験問題について、限られた紙面の中ではあるが、今後の御検討の一助になることを期待して、本協議会の意見と評価を記す。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 「世界史A」について

大問は5問(昨年は4問)、設問数は30問。試験時間は60分で、満点は100点。史料やグラフ、統計に加え対話文の読み取りなど、多岐にわたる素材からの出題で構成されていた。欧米史の割合が大きかったが、さほど大きな地域の偏りは見られなかった。

昨年度より文章正誤が17問から13問に減少した。正誤の組合せは1問から4問に増えた。グラフ・表を用いたものは1問から2問に増えた。地図問題は1問出題された。

出題分野については、政治史が中心であったが、文化史・経済史からの出題もありバランスがよかった。また、時代については昨年度より古代・中世からの出題が減り、前近代・近世の出題は増え、近代・戦後の出題は減った。「世界史A」という科目の性質からして、出題傾向は妥当である。

地域別にみると、ヨーロッパが8問、東アジアが6問、アメリカが4問、西アジアが3問、アフリカが1問、そして複合問題が7問であった。複合問題にもヨーロッパ関連の事項が含まれているため、ややヨーロッパに偏っている傾向が見られる。なお、東南アジアについての出題はなかった。しかし、全体として大きな偏りはなく、各地域から出題されており、設定としては妥当である。

知識・理解を問う設問を中心としながら、思考力・判断力を問う設問も豊富であった。文章を丁寧に読ませ、読解力を問う設問も複数あり、対話文とリード文がよく活かされていた。

第1問 外国からの帰国後に社会の改革を志した人物

Aの資料はタフターウィーの作品からの引用

問1 資料文中の空欄に当てはまる語句と、資料の背景となるできごとを組み合わせる正誤問題。文章の読解力を主に問うている。内容としては標準的で、平易な問いである。

問2 エジプトの近代化についての年代整序。標準的な内容で、難易度は平易である。

問3 イスラーム世界の近代化についての文章正誤。標準的な内容で、平易な問いである。

Bは高校生による魯迅についての対話文

問4 歴史的事象についての知識および文章の読解力を問うている。標準的な内容で、平易である。なお、正答である㊸について、下関条約で清が日本に割譲した「澎湖諸島」は、教科書二社に記載なし(「台湾、遼東半島など」と記載)。また中学生段階でも、下関条約の内容について「澎湖諸島」は扱っていないものがある。

問5 魯迅の作品と、20世紀前半の日中間におけるできごとを組み合わせた年代整序問題。五・三〇事件については教科書三社には記載がない。しかし、義和団事件が孫文来日前の1900年で、溥儀が満洲国の執政についたのが日中戦争前の1934年であることから正答にたどり着くことができる。標準的な内容で、難易度は平易である。

問6 南京に関連した歴史的事象の正誤問題。標準的な内容で、難易度は平易である。基礎

的な知識と、該当の歴史的事象が発生した位置を地図上で特定させる技能を問うている。
第2問 時代背景や社会状況を反映した風刺画と教科書について

Aは20世紀初頭のヨーロッパ史についての、先生と生徒による対話文からの出題。第一次世界大戦前のバルカン半島の情勢と、第一次世界大戦にいたる過程を問うものである。

問1 第1次バルカン戦争の敗戦国であるオスマン帝国における、歴史的事象についての文章正誤。4つの選択肢の内容から、正答にたどり着くことは容易である。標準的な内容で、難易度も平易な問いである。カルロヴィッツ条約については教科書一社には記載がなかった。

問2 二つの風刺画に描かれている状況と、歴史的事象を合致させる知識と思考力・判断力を問うた良問である。第一次世界大戦勃発の要因となったバルカン半島の情勢について、第1次バルカン戦争の内容と結果、および第2次バルカン戦争の原因と展開を詳しく学習し知識を身に付けていることを求めている。内容は標準的であるが、難易度は高い。

問3 二度のバルカン戦争と第一次世界大戦におけるブルガリアの動向についての正誤問題。第一次世界大戦の勢力図については、どの教科書にも地図が掲載されている。標準的な問いであり、問題設定も妥当である。

Bは19世紀のフランスについての、先生と生徒による対話文からの出題。

問4 フランスの第三共和政のもとで起きた歴史的事象についての文章正誤。正答となるドレフュス事件については教科書一社に記載なし。誤答の①「パリの都市改造」については記載がない教科書が多い。以上の点から、消去法でも正答することは難しいため、問題の設定として妥当ではない。

問5 ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の即位式がヴェルサイユ宮殿で行われたことと、その地図上の位置、そしてアルザス・ロレーヌについての知識と地図上の位置を特定させる力を問うている。標準的な内容で、難易度は平易である。

問6 フランスの第三共和政における歴史的事象についての正誤問題。標準的な内容で、平易な問題である。なお、「岡村さんのメモ」における「徴兵制を創始した」という表現は誤答を誘発する可能性がある。「導入した」等の表現の方が適切であろう。

第3問 人やモノの移動と産業の発展について

Aは世界のガラス産業についての、先生と生徒の対話文からの出題。

問1 イタリア諸都市の歴史について記した文章と、地動説を唱えて「ガリレイ」を組み合わせさせた正誤問題。東方貿易については、掲載がない教科書もあるが、誤答の選択肢「あ」の商業貿易との正誤判断で回答することは可能。やや難問である。

問2 フェニキア人についての文章正誤。基礎的な内容で、平易な問いである。

問3 対話文の内容についての正誤問題。知識よりも読解力と判断力を求めている。難易度は平易である。

Bはアメリカ合衆国の人口動態についてのグラフと表、また、それについての対話文からの出題。

問4 アメリカ合衆国の奴隷制についての文章正誤。標準的な内容で、平易である。

問5 アメリカ合衆国の人口動態についての、正誤問題の組合せ。文中の年代から、その時期に起きた歴史的事象を判断する力と、知識を問うている。標準的な内容で、平易である。

問6 1940年代から1960年代にかけてのアメリカ合衆国における歴史的事象についての文章正誤問題。基礎的な知識・理解を問うもので、標準的かつ平易な問いである。

第4問 政治史と文化史の関係について

Aはカール5世のミュールベルクの戦いと、フェリペ2世の寓意画についての対話文からの出題。

問1 16世紀のヨーロッパにおけるキリスト教関連のできごとについての文章正誤。基礎的な知識を問う、平易な問いである。

問2 対話文の内容からレパントの海戦を導き出す思考力・判断力と、その敗戦国であるオスマン帝国についての知識を問うものである。オスマン帝国がマムルーク朝を滅ぼしたことについては基礎的な事項ではあり、他の誤答との比較で容易に正答することができる。ただ、教科書二社には、オスマン帝国がマムルーク朝を滅びたことの記載はない。オスマン帝国の台頭を扱う箇所、「16世紀にエジプトやシリアを征服」とある。

問3 フェリペ2世の治世におけるできごとについて、文中の空欄にあてはまる語句の正誤を組み合わせるもの。スペイン統治下で起きたオランダ独立戦争と、フェリペ2世がカトリックの信仰を強制したことは、いずれも基礎的な知識である。標準的な内容で、平易な問いである。

Bは世界の文字についての、先生と生徒の対話文からの出題。

問4 西夏文字の特徴と成立背景の正誤を問うもの。特徴と成立背景については、対話文の内容から読み取ることができる。読解力を問うている。問題設定は妥当なものであり、平易な問いである。なお、西夏文字については教科書二社には記載なし。

問5 モンゴル帝国についての文章正誤。標準的な内容で、平易な問い。

問6 ネルチンスク条約における国境である黒竜江と、琉球の立場を問う正誤の組合せ。ネルチンスク条約については、いずれの教科書にも記載があり、また、清の支配領域を示した地図も掲載がある。琉球についても同様である。妥当な問題設定である。

第5問 様々な国の思惑によって維持された国際秩序について

Aは大西洋憲章の資料からの出題。

問1 文中の空欄「ア」(チャーチル)とその業績についての正誤の組合せ。ヤルタ会談については、いずれの教科書にも記載があり、多くの出版社が写真も掲載している。標準的な内容で、平易な問いである。なお、「鉄のカーテン」演説(フルトン演説)については、教科書二社には記載がない。しかし、「鉄のカーテン」演説が第二次世界大戦後であることから正答にたどり着くことは容易である。設問の設定としては妥当である。

問2 第二次世界大戦終結から1950年代までにおける歴史的事象についての文章正誤。①の「コミンテルン」については一社の教科書以外はいずれも記載あり。②のロカルノ条約はいずれも記載あり。③のANZUSについては一社のみ記載あり。④のバグダード条約機構についても一社のみ記載あり。特定の出版社でのみ取り扱っている事項で選択肢が構成されており、それが正答であるという状況は、問題設定として妥当ではない。

問3 歴史上の民族自決について、問題文の内容から正誤を判定させる問い。主に読解力を問うている。問題文をしっかりと読めば容易に正答できる。1960年代の「アフリカの年」もいずれの教科書にも記載がある。問題設定として妥当である。

Bは米ソのミサイル開発についての、先生と生徒の対話文からの出題。

問4 1950年代から1960年代にかけての米ソのミサイル開発について、対話文の内容の正誤を問うもの。読解力と思考力・判断力を問うている。対話文をしっかりと読んでいれば正答できる。標準的な内容で、難易度は平易である。

問5 文中の空欄「イ」に当てはまる文についての正誤問題。正答となるソ連によるアフガニスタン侵攻はいずれの教科書にも記載がある。標準的な内容で、問題設定も妥当である。

問6 核保有国が保有する核弾頭数の推移についてのグラフと、その説明文の正誤を問うもの。戦後史については、歴史的事象の年代を細かく把握するような学習を求めている。難易度は高い。選択肢「あ」の「核拡散防止条約」については教科書三社に記載なし。選択肢「い」の「中距離核戦力全廃条約」については、教科書二社に記載なし。

(2) 「世界史B」について

今年度の共通テストは大問数4問、小問数33問で前年と比較すると大問数・小問数共に1問減少した。ただしリード文の数は12で前年と同じになっているため文章量などに大差はなかった。大問数と小問数および配点は、第1問が小問数9で配点27点、第2問が小問数8で配点23点、第3問が小問数7で配点22点、第4問が小問数9で配点28点であった。24と30は4点問題となっていて、配点が4点の問題は今回が初出である。また、「世界史A」との共通問題はなかった。

出題を正解の選択肢を基に判断し時代別にみると、古代に関する出題が5問、中世に関する出題が7問、近世に関する出題が3問、近代に関する出題が8問、現代に関する出題が6問、複数にまたがる出題が4問であった。地域別にみると、アジア（東アジア・内陸アジア・南アジア・東南アジア・西アジア）・アフリカに関する出題が12問、ヨーロッパ（西ヨーロッパ・東ヨーロッパ・ロシア）に関する出題が19問、複数にまたがる出題が2問であった。出題形式で見ると、肢文の中から正文を選ぶものが16問、誤文を選ぶものが1問、複数事項組合せを選ぶものが12問、地図に関するものが1問であり、年代の配列に関するものが2問であった。前年と比較して正文を選択する問題が減少し、複数事項組合せを選ぶ問題が増加したことが特徴的である。全ての大問で史料文、地図、表、文献や図版などの資料が提示されていた。その中でも特に、図版や史料・グラフなどの内容を読み取って解答する問題は12問であり、残りの21問はリード文の読解等は必要であるが「基本的な知識及び技能」のみで解答できる問題となっていた。問題作成方針にも明示されている、「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定に関しては、リード文12個のうち4つが授業を中心とした会話文、一つがゼミの発表という学習の過程を意識したものとなっていた。前年はリード文12個のうち10個が会話文であったため、会話文が大きく減少した。

本稿では、特に問題教科・科目の問題作成の方針における(2)地理歴史「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、「日本史B」に明示されている、①歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程が重視された問題であるか、②用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する問題であるか、③教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題であるかどうか、④仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題であるかどうか、⑤歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題であるかどうか、といった観点から具体的に検討する。

第1問 「世界史上の体制と制度」

Aは中国の王や皇帝の一族を制度上どのように位置づけるかという議論を基にした出題。

問1 資料1・2の内容について正文を選択させる問題。観点③に当てはまる良問である。

問2 中国の反乱についての正しい組合せを選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問3 中国の反乱についての正しい組合せを選択させる問題。後者については、明王朝内の靖難の役だとわかれば一族同士の争いということが推測できるかもしれないが、永楽帝が建文帝のおじに当たるという細かい知識に関する問題である。観点②・⑤に当てはまる問題であるが、前者で明の初めの官僚の話があげられているので、それが後者にも当てはま

ると深読みをして靖難の役ではおかしいと判断してしまった受験者も一定数存在したと考えられる。

Bはイングランド国王の後継者をめぐる政治的動きを記した記録を基にした出題。

問4 オットー1世についての正文を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問5 ノルマンディー公の名前と資料1・2から読み取れる内容について、正しい組合せを選択させる問題で、知識・技能と思考力・判断力・表現力等をどちらも問う問題である。資料1・2は初見の資料であり、ノルマン=コンクエストの細かい内容に触れているため授業で学んだ知識を関連付けられるかは疑問である。ただし、十分読解で正答を導ける上、同じ出来事を異なる二つの視点の資料から読み解く問題となっており、観点①・②に当てはまる良問といえる。

問6 イングランドについての正文を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

Cはイギリスの福祉制度の歴史を基にした出題。

問7 ドイツの年金制度の導入時期として適当なものを選択させる問題。リード文からヴィルヘルム2世の治世下でかつ1908年以前ということがわかる。標準的な知識を問う問題である。

問8 イギリスの自由党についての正文を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問9 インタビューで資料のように答えた首相と、その人物が行った改革について、正しい組合せを選択させる問題。観点③に当てはまる問題である。

第2問 「世界史における諸勢力の支配や拡大」

Aはアレクサンドロス大王のアジア支配に関する発表準備を基にした出題。

問1 資料1～4についての正文を選択させる問題。観点③に当てはまる問題である。

問2 評価Ⅰ・Ⅱがなされた時代背景について述べた文の正誤の組合せとして適当なものを選択させる問題。観点①・②に当てはまる良問である。根拠となる資料を考えさせるような問題であれば、観点④にも当てはまる問題にできていたのではないかと感じる。

Bはアメリカ合衆国の領土に関する法律を基にした出題。

問3 アメリカの領土拡張について正しい組合せを選択させる問題。資料1は初見の資料ではあるが、「本法令によって規定された」という部分に着目して授業で学んだ知識と関連付けて解答させる出題であり、観点③に当てはまる良問である。

問4 資料2・3の法律の名前とその法律がつくられた背景について、正しい組合せを選択させる問題。観点③に当てはまる問題である。

問5 問4で選んだ法律が施行されたことをきっかけに起こった事柄として正文を選択させる問題。観点②に当てはまる良問であるが、⑥の連邦派と反連邦派の対立はアメリカ合衆国の歴史において継続的に行われていたことであるため、受験者を惑わせる選択肢になっているように感じた。また、前問で選んだ解答により正答が変わる形式の問題は平成29年度に行われた試行調査以来の出題であり、共通テスト本試験としては初めて出題された。

Cは朝鮮戦争における休戦交渉に関わる電報を基にした出題。

問6 朝鮮戦争について正しい組合せを選択させる問題。観点③に当てはまる問題である。

資料の3, 4行目で「ウ」がアメリカに敵対する存在であると気づく必要があり、やや難しい。

問7は、チェコスロヴァキアについての正文を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問8 中国の第1次五か年計画の投資額のグラフとソ連の第1次五か年計画について、正しい組合せを選択する問題で、知識・技能と思考力・判断力・表現力等をどちらも問う問題になっている。前者は投資額が5割を超える部門の組合せを選ぶものでとても易しい。第2次五か年計画のグラフも載せて比較させるような問題にすることもできたのではないかと感じる。

第3問 「交通の発達」

Aはインド亜大陸における交通の歴史に関する会話を基にした出題。

問1 アショーカ王の治世に起きた出来事を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問2 デリーについての正文を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問3 メモ1・2の正誤を判断して正文を選択させる問題。観点③に当てはまる問題である。メモ2に関しては、デリーとコルカタが沿岸の都市ではないから誤りと判断してしまった受験者も一定数存在したと考えられる。そのため、「図2に見られる黄金の四角形は、かつてのイギリス植民地の拠点として発展した沿岸の大都市を複数通っていることがわかる。」などの表現にした方が、文章の解釈で悩ませることがなかったのではないかと考える。

Bはアメリカの鉄道利用の変化を基にした出題。

問4 アメリカ合衆国の出来事を正しく並び替えたものを選択させる問題。第一次世界大戦後の黄金の20年代→世界恐慌→第二次世界大戦への参加という大まかな流れが理解できていれば解くことのできる標準的な知識を問う問題である。観点②に当てはまる問題である。

問5 仮説中の「イ」に入る語句と「ウ」に入る文章について、正しい組合せを選択させる問題。知識・技能を問うものと思考力・判断力・表現力等を問うものを組み合わせた問題である。

Cはロシアの歴史と文化についての授業を基にした出題。

問6 資料1の空欄「エ」に入る国と下線部①の理由について正しい組合せを選択させる問題。知識・技能を問うものと思考力・判断力・表現力等を問うものを組み合わせた問題である。資料1は、観点③に当てはまる問題である。

問7 メモ1・2の正誤を判断して正文を選択させる問題。標準的な知識を問う問題である。

第4問 「世界史上の言語や文化及び人々の文化やアイデンティティ」

Aはシリア語に関する会話を基にした出題。

問1 コンスタンティヌス帝の事績と開催した公会議の内容について、正しい組合せを選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問2 制度について正文を選択させる問題で、標準的な知識を問う問題である。

問3 シリア語とそれを用いた人々の歴史について正文を選択させる問題。リード文を参考にすることで選択肢の正誤判定がしやすくなっている。

Bはコロンブスの言語を基にした出題。

問4 言語と作品について誤文を選択する問題。標準的な知識を問う問題である。

問5 ポルトガル王室がコロンブスを支援しなかった理由として正文を選択させる問題。観点②に当てはまる良問であるが、選択肢がどれも抽象的で正答を判断しづらいように感じる。

問6 コロンブスをスペイン人であるという説に関する思い込みとその背景に価値観について、正しい組合せを選択させる問題。観点②に当てはまる良問である。

Cは書道の授業における会話文を基にした出題。

問7 安史の乱について正文を選択する問題で、標準的な知識を問う問題である。

問8 文章中の空欄に入る語句と文について、正しい組合せを選択させる問題。中国の文化史に関する標準的な知識を問う問題で、後者はリード文からも正答が推測できるようになっている。

問9 メモ1・2の正誤を判断して正文を選択させる問題。清の文字の獄・北魏の漢化政策について内容を理解していれば正答を導ける問題である。

3 総評・まとめ

(1) 「世界史A」について

前述のとおり、今年度の「世界史A」（本試験）は知識・理解を中心に問いながら、思考力・判断力、そして読解力を問う設問も豊富であり、バランスの良い問題構成であった。60分という試験時間の中で処理する情報量（文字数）として妥当な範囲であった。学習指導要領の「世界史A」の学習内容や令和6年度の問題作成方針から逸脱したものもなく、全体として標準的な難易度（昨年度よりも易化）であった。

ただ、特定の教科書のみに記載・掲載されているものが選択肢で扱われており、使用している教科書によって正答することが困難になる設問があることについては昨年度に引き続き改善を求める。「世界史A」という科目の性質上、教科書をよりどころとして学習を進める学校が多い。そのため、特定の教科書にしか記載がない事項を問うてしまうことは平等性を欠く。問題作成方針の出題教科・科目の問題作成の方針において、「教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題〈中略〉などを検討する。」と記されているものの、選択肢の一部になっているものでありながら、正誤を判断するに足る根拠が問題の中になければ、妥当な設問ではない。次年度からは「歴史総合」が試験科目となるが、「歴史総合」も教科書によって記述内容に大きな違いがある。「世界史A」で指摘してきたことが繰り返されることのないよう期待する。

「世界史A」の共通テストは今年度が最後となったが、今までの課題を改善しながらも、受験者の知識及び技能、思考力・判断力・表現力等を適切に図ることのできる非常にバランスの取れた出題であったと考えられる。問題作成にご尽力なされた方々に、心から感謝申し上げたい。

(2) 「世界史B」について

公表された今年度の平均点を見ると、世界史Bは昨年から1.85点上がり、60.28点となった。「日本史B」と比べるとやや高く、「地理B」と比べると少し低くなっている。「世界史B」の平均点については、試験の制度設計や問題作成方針、また他の地理歴史との兼ね合いを考えれば予想しうるものであり、今年度については妥当であると考えられる。

出題形式に関しては、小問数が1問減ったこと、リード文における会話文が減ったこと、史資料を読み取らないと解答できない問題が減ったことが印象的である。これらに関しては問題文の分量を減らすことで受験者の負担を軽減しようという意図が汲み取れた。一方、読み取り問題の減少に伴って増加した「知識及び技能」のみで解答できる問題に関しても、リード文から問われている内容を理解した上で正文を選ぶ問題が多くなっており、単語のみを暗記するのではなく、歴史の流れや他の単語とのつながりを重視してほしいというメッセージ性を感じられた。また、複数事項組合せを選択する問題も増加傾向にあり、特に「知識及び技能」を活用して理解したことと「思考力・判断力・表現力等」を活用してグラフや史料から理解したことを組み合わせで解答する形式の問題も増加した。他にも一つの歴史的事象を異なる立場の資料から読み解く問題や、同じ人物に対する評価が時代ごとの背景によって異なることを示した問題など、興味深く意欲的

な問題が多かったことも評価できる。

一方、出題のバランスについては、地域間でのばらつきが大きく、ラテンアメリカやアフリカ、東南アジアに関する出題が一つも無かったことは問題視せざるを得ない。史資料が豊富なのはヨーロッパや東アジア地域のため偏りが生じるのは仕方ないことだとも思うが、「知識及び技能」のみを必要とする問題も多く出題しているためほかの地域を組み込むことはできなかったのではないだろうか。また、昨年度・今年度と得点分布が正規分布ではなく、ピークが40点前後と88点前後と二つあることは、共通テストの性格上不適切であると考え。正規分布に近づけるためには、問題量を適正化するとともに、「知識を問う問題」「知識と史料から読み取った情報とを組み合わせる問題」などのバランスを再考する必要があるだろう。さらに、今年度は全体的に資料を活用した思考力を問う問題よりも知識を問う正文選択問題の方が正答率が低い傾向にある。これは知識を問う問題の選択肢において抽象的な言葉が多いことが原因だと考える。受験者を惑わせるような曖昧な言葉の選択肢は極力減らしていただきたい。昨年も指摘させていただいた問題の量（文字数）については、昨年度の約17,400字に対して約16,200字と原稿用紙にして3枚分ほど減っていて改善したように見えるが、一昨年度の12,600字に比べると大幅に増えていることに変わりはない。「思考力・判断力」を問う問題に解答するにはそれなりの時間が必要である。他の問題に比べて難易度がさほど変わらないと思われる32と33の正答率が、それぞれ38.16%、26.80%と低いのは、時間が足りなくなってあわてて解答した受験者が多かったからではないだろうか。原稿用紙にして約40枚という文字量が妥当であるのか検討していただきたい。そして、追・再試験問題との関係について、追・再試験は2週間遅く実施されることもあり、従来は本試験よりも難易度が高い印象を持っていたが、昨年度・今年度は追・再試験問題の方が文字量が少なく（2023年度約13,500字、2024年度約15,500字）、その分だけ本試験問題よりも受験者の負担が軽いと思われる。この点についてもご検討いただきたい。

「世界史B」の共通テストは今年度が最後となったが、今までの課題を改善しながらも、受験者の知識及び技能、思考力・判断力・表現力等を適切に図ることのできる非常にバランスの取れた出題であったと考えられる。問題作成にご尽力なされた方々に、心から感謝申し上げたい。

4 今後の共通テストへの要望

来年度からいよいよ「歴史総合・世界史探究」の共通テストが始まることとなる。「世界史」については、試作問題を踏まえると、「歴史総合・地理総合・公共」の「歴史総合」50点分のうちの25点分の共通問題と「世界史探究」の問題75点分の組合せで1科目となることが推察されるが、「歴史総合・日本史探究」と共通問題となる「歴史総合」の部分とともに、世界史分野と日本史分野のバランスを程よく出題していただきたい。特に「歴史総合」の「日本史探究」と従来の「日本史A」「日本史B」のように、1970年代以降の出題がほとんどなされないようにはしないでいただきたい。そのようなことがあれば、今まで以上に試験される年代の上限における「世界史」と「日本史」の不公平性が増すとともに、高等学校現場での「歴史総合」の授業では1970年代以降は扱わないような風潮、あるいは「歴史総合」を世界史分野と日本史分野に分けて「世界史探究」・「日本史探究」と一体化して従来の「世界史B」「日本史B」と変わらない授業を行う風潮が生じかねない（既にこのようなカリキュラムを組んでいる高等学校もあるときく）ということを提言しておく。このような意味において、共通テストは「歴史総合」の命運を握っているということを理解していただきたい。さらに、これは前年度も指摘していることだが、「歴史総合」の教科書は世界史の教科書以上に記述内容の差が大きくなっているため、学んだ教科書によって有利・不利が生じることはないようにしていただきたい。合わせて、全体の問題量について、受験者が「思考」「判断」する時間が確保

できるように配慮していただき、得点分布が正規分布に近づくようにしていただきたい。高等学校での「歴史総合」「世界史探究」での学習内容が反映され、歴史を学習することの楽しさを感じられるような問題作成を期待している。

最後に、今まで「世界史 A」「世界史 B」の問題作成にあられた委員の皆様に感謝を申し上げます。